

研究

佐伯の殿様浦でもつ「高政」編

宮下 良明

(会員 佐伯市古江区)

佐伯領初代城主毛利高政侯は今を去る四百年の昔、慶長六年(一六〇一)四月五日説、二万石を宛がわれ入封した。

中世数百年の長い莊園制時代が続き、応仁の乱が勃発戦国末期、豊後大友氏の除国により、豊臣秀吉の檢地終了後、蔵入地となった臼杵城に秀吉の代官、太田飛騨守一吉が佐伯領を兼ねた支配者となって在番。さらに関ヶ原合戦で大阪方西軍に付いた一吉も、徳川の天下となり失格、其の後を受けて臼杵城主となった稲葉氏が一時佐伯領を支配圏に置いた。さらに徳川家康の命を受け佐伯領有者となった毛利高政は最適地城山に築城を手掛けると共に、城下の町づくり、蒲江の地割、領内荒地の開

発、庄屋制度を設け村浦を改革、規約を作る等領内発展に尽力した功績は計り知れない。

高政の知行高は二万石の小藩であったが豊後水道に広がる領海域は、津久見無垢島以南蒲江深島まで日豊海岸の大半を支配権に置いた。「佐伯の殿様浦でもつ」と云われる所以には、無尺蔵とも云うべき海の資産の背景があり、一説に十萬石の格式を持っていたと云われている。



第1図 日豊海岸地域

本項は高政入封四百年を機会にその人間像並びに、佐伯領主以前の足跡を追究して見たいと思う。

一、高政の出自

佐伯二万石を安堵あんどされた高政の生誕地、尾張刈安賀花井方「一宮市」は濃尾平野の中心地で、古来交通の要衝として栄えた所。戦国の御代、尾張国守護職、斯波氏しばが守護代織田氏に敗れて絶え、下剋上げこくじょうの闘争に明暮れ、戦火絶え間の無かった地方である。(日本の歴史)

右の世情下、永祿二年(一五五九)森一族九郎左衛門の嫡子として生まれ「勘八」と称した。以上出自である。関係論文は一宮市史に取り上げられている。

一、高政の気性

次の「鶴谷遺文」古文書により高政の気質を想像してみると、慶長十二(一六〇七)年に配布した、掟おきて、覚触おぼえか等の内容から大方の気性を知るものと思う。

- (1) 耕作どきは男はむろん女も出て田畑の草を取る事。
- (1) 草は一番草二番草三番四番まで取る事。
- (1) 耕作中は朝飯も昼飯も夕飯も女が耕作地に運び食べる事。
- (1) 田畑の中を筋違いに通るな。通った者がいれば搦かめ捕り連れくれば褒美を与える。

以上古文書の読下しであるが勿論浦々にも同様のものを配布している。誠にきびしい掟、触書である。

しかし又一面温情主義者でもあったようで、次の文書でそれを知るものと思われる。

- (1) 他の浦の者に堅く禁じているが、その浦に住む者は網を使って魚を取り旅商人に売つてもよい。
- (1) 開墾に力を尽くしたので諸役を免じる。

以上領民の生活にも気配りきくばりをしていることが判る。ただし総体的には戦国を生抜いた武将特有の体質は、右の文書からはやはり厳しい性格の持主であった事が窺うかがわれる。高政以後、十二代高謙までの歴代の領主約二百六十年間の事蹟については一部を除き殆ど江戸住居であったと想われるので省略、其の間は家老、重役が藩政に当たっていたようである。

一、高政の浦政策とその領域

佐伯領の浦を大別して津久見浦・上浦・中浦・下浦の呼称で区割設定した。地図を見て戴くと大方の線引はできると思う。大別した浦々に沿う形で北の方から無垢島・保戸島・大島・大入島・屋形島・深島と続いている。

右の島々には早くから漁民が住み付き漁労、見張、海の安全等の仕事に当つてきた。高政文書よりその背後の状況を判断できると思ふ。

その外、合わせて数十の小島がそれぞれの海域に点在し、包含する陸地は長く、現在二市三町一村が展開されている。小藩と云えどもその領海は広いのである。

この「リアス」に富める風光明媚なる海域を総称して現在日豊海岸固定公園と名付けられている。

いづれにしても高

政に依り確立された

浦政策は、歴代領主

がこれを継承、浦役

人、浦目付を置き、

抜け荷、密売、密漁

等の取締りと共に運

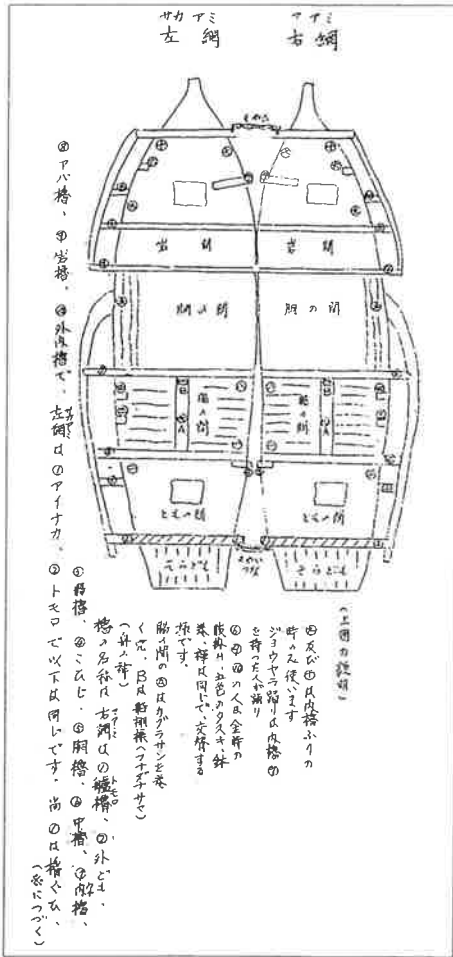
上金、年貢産物を徴

収した。さらに他領

より浦々に仮停泊の

船に対しては泊料な

る税金を徴収、その



第2図 ガゼ大舟
(『佐伯史談』56号による)

徹底した制度は高政によって作られたものと考えられる。さて領内浦々には、網代制度(地引網、小引網等の引き上げ場、舟共総称してガゼ)を設け、一番網、二番、三番の受元に対し運上金額を決め相応に取立てた。この制度で治安秩序が保たれ藩の収入に大きく貢献したと云われる。此の舟図はガゼ大舟で、史談五六号引用の物であるが今では幻の漁法になつてしまつた。ジョウヤラ船はその名残である。

さらに領民対策の一つには前述した如く、掟、覚等の書状(図書館蔵)を各村浦庄屋に度々送付けている。内容はいづれも農漁民の統治と撫育を目的としたものではあるが、その裏には年貢、運上金の徴収がスムーズに取り立てられる為の政策であったものと考えられる。さて前掲した地図で判る如く、太平洋―日向灘―豊後水道に流入する黒潮に乗り押寄せて来る無尽蔵とも云える魚貝類、種々の海藻は食料、飼料、肥料としてその価値は全国に名高く特に佐伯イリコは今でも有名である。

以上述べた如くこの日豊沿線の大半を支配し、知行高二万石以外の収入源を手中にした初代城主高政の政治手腕は徳川幕府対応にも良く海の収益金が当てられ上納していたものと考えられる。

つまり抜かりの無い知恵者であったことが判るのである。猶高政以来確立されて来た浦政策の一つに、漁場の権利、地前権、磯の権利、入会権、イサリ権等の専有権が「シキタリ」となって残り今猶利権争いの火種になっていることも付加えておきたい。

一、高政前半生の考察

寛永十年(一六三二)六十九歳江戸にて没とあるから佐伯に入封した、慶長六年時の年齢を逆算すると四十二歳の時に着任した事になる。それ以前の足取りは必ずしも解明されている訳ではない。つまり謎のようである。

しかし最近の情報化の発達で前述した生誕地方面に伝えられている幾多の書籍で高政の青年期が靡氣乍ら判るようになりつつある。

是迄高政関係の記録類、編纂物、系図等多くの出版物を見てきた。けれども、いづれも後代に目的の基で作成されたと思われ記載されている内容は決して史実を伝えているものではない事も判明されている。

古文書にしても偽文書か否やを十分検討の末でなければ後で失敗する。豊後大友文書ですら偽文書の可能性が高い「鎮西御家人の研究」と云われる今日である。

いづれにせよ高政前半生の謎説には、生地尾張刈安賀と接点する事蹟の究明が先決問題になるものと考ええる。父森九郎左衛門の墓塔が刈安賀正福寺に在ったと地誌尾張塘叢が伝えている処を見ても全く荒唐無稽の作文と云う事はできない。作為あって記載された文書で無い丈に、

資料的価値は高いものと思う。傍証の一つに寛永十九年（一六四二）幕府に提出した毛利系譜作成に当り、近江国より仕官した、佐久間九郎兵衛なる用人が前述した正福寺を訪ね毛利家の先祖を調べたと尾張の書籍、塘叢は述べている。以上半生の謎を究明する問題の一端を述べてみた。

一、玖珠角牟礼城の築城者

去る四月十四日の史談会日帰り研修旅行で玖珠町の史蹟を訪ねた。切株山城、三島公園、角牟礼城、広末神社、いずれも大規模な造築には感動するのみであった。角牟礼城から見渡す玖珠町の景観も又すばらしく、目の城郭はメサ形の山頂を取巻き広大に築かれていた。その廃城と化した畷壁の石垣は六太積みとの事。

（六太積み）近江国六太村の職農民に依る石積み（の工法）
信長の築いた安土城石垣は有名な六太積み

玖珠教育委員会の案内版には、佐伯に伝封した毛利高政による築城説を掲示していた。ただし果して高政の居城であったかどうか、その辺の疑問を次に追究してみたいと思う。

最初に築城説を決定した文献は「よみがえる角牟礼



玖珠町文化財案内板

城」玖珠町編集と考える。右論

文中築城に関する史料はないと述べ推定として高政の名が挙げられている。

〈問題点〉

(1) 駒井日記
中、文禄二年

（一五九三）九月十三日の記、近日中毛利兵橋、宮木長仁など遣わす（後略）。

右日記は豊臣秀吉が豊後日田、玖珠に近日代官を命ずる日記。この中に高政も同様に入れて解釈すれば文禄年中の築城説が可能になる。しかし兵橋の名があっても高政は見えない。文禄年中高政の行動は不明。

(1) 慶長五年（一六〇〇）まで日田玖珠方面に高政の呼称は見えない。毛利民部大輔、毛民太の呼称で、全国大名武将に通用する人物は「友重」と考える。友

重即ち高政かの確証が重要と考えられる。

- (1) 大友氏除国後、豊後入りの大名は文禄二年九月竹田岡城に入城した中川氏のみと推察している。

高政の豊後入りの年代が不明、又大名か代官が、代官支配で大規模築城は不可能と考えられる。

- (1) 高政は佐伯城慶長六年以降築城、その事に關し、竹田中川家隱密は、佐伯は山城にて少しの普請も無く御館は城より下に御座候とある「竹田中川家文書一八五号」。久留島氏も大名の格式で玖珠領に入封、或いは佐伯城同様、築城を手掛けたが状勢の変化で取止めたのではないかと考えられる。

- (1) 日田玖珠方面には、民部大輔友重書状三通、民部大輔高政書状一通が確認されている「大分県史料(13)」。この古文書は年代を欠くが同一人説の謎を解く鍵になる書状と考えられる(筆者は別人説)。

以上独自の判断で問題点を挙げてみた。いずれにしても友重、高政の究明が角牟礼城解明の条件になるものと思ふ。

次に「天瀬町誌」について少し論じてみたいと思ふ。築場をめぐる村の紛争(論)と題して「出口村書上」文書、

取上げた一連の論文に毛利高政が慶長二年(一五九七)朝鮮出兵時、関連の紛争と指摘、すでに佐伯領主として朝鮮に渡海したかの如く論じている。

しかし当時佐伯にはまだ入封しておらず、朝鮮出兵と佐伯を結び付けた天瀬町誌は年代がかみ合わない。さらに文中に見える人物達は後代佐伯で仕官した人物達で改めて出口村書上の内容は再検討の必要性が考えられる。

上述の通り高政、日田玖珠地方での行跡は諸説が多く統一論はない。ただし慶長六年以後元和二年まで、久留島氏、小川外記(光氏)支配地以外の地域は高政の代官支配と考えられる(大分県史料37)のでこの間は除外する。

以上高政入封四百年に当って、浦政策、半生の謎、日田玖珠での不明点を掲げてみた。佐伯入封以後の事蹟はほとんど知られていたので改める余裕はない。本項は高政を讚えたものでもなく又それ以外のものでもない。ただ高政が戦国の世を生き抜いてきた時代に興味があった。応仁の乱以後、三河、尾張、美濃の国々は下剋上の政争に明け暮れた。その真只中に生まれ、一領具足の世を幼少より見つめ育ってきたその時代の武将達が大名となって豊後一円に入国してくるのである。

織田、豊臣、徳川と天下の移り変わり行く厳しい時代、二万石の大名にまで上った高政の人生は現在の感覚で捉える事はできない。後代に貴種を目的に編纂された文献記録類、つまり秀吉のおとし種説、中国毛利攻めの人質説、輝元より毛利姓の説、家紋矢筈の裏話等。諸本でみた流離談が後世に作られ、それに古文書類がカバーして史実かの如く今日に及んできたものと判断される。

その影に隠れ生誕地尾張方面に目を向けなかった事も足跡不明の一因と考えられる。又一方伝承、茶飲話にも真実が潜^{ひそ}んでいる事等を見逃してはならない。茶飲話の中にも尾張方面の地誌中、高政関連の記載内容とが驚く程整合している箇所が多々見受けられる。今後とも追究してみたい。以上高政佐伯領入封四百年に当って一筆を投じてみた。会員諸氏の御検討申上げたい。

【参考史料】

「史料館研究紀要第三号、中野等教授論文」

「先哲講座、毛利高政、先哲史料館 平井義人氏」

「天瀬町誌」「中川文書」「よみがえる角牟礼城」

「大分県史料(13)(37)」「尾張塘叢」「黒田家譜」

「駒井日記」

宗太郎峠

惣太郎峠とも書く。宇目町と宮崎県東臼杵郡北川町との境にある峠、国道一〇号線が通る。標高大原付近二三〇ト。峠に道ができたのは明治二十七年(一八九四)ごろで、それも馬がやっと通れるほどの道で、大分―宮崎の近道ではあるが、やはり主要な道は梓峠あずまつげや赤松峠であった。峠が脚光を浴びるのは国道になったことや、鉄道が大正末にここを通ったことのためである。

道は拡幅され、路面も整備されたが、それがいつ、どのような形で行われたか不明な点もある。しかし、難路だったことは確かで、峠路が本格的に改修されたのは、昭和三十四年(一九五九)から総工費四九億七五〇〇万円かけて改修、トンネルを掘り、がけを削った。新しく盛土をしてカーブの少ない一〇ト道路にした。そして九州で一番遅れていた国道改修は昭和四十二年完成した。

これで、一日かかった山越えもわずかで一時間に短縮された。昭和四十四年八月調査では、一日三四五五台と二年半で七倍近く増加している。また通過車のうち三〇〇台近くがトラックで産業道路としての役割を果たす峠路として新しく蘇生した。(「宇目町誌」)